

届け 世界の果てまでも

令和2年10月 9日

No. 38

文責 校長 飯久保一男

学習意欲



明治5（1872）年に学制が公布され、日本の学校制度が始まりました。日本の学校の歴史は150年近くになります。 ※本校は明治6年に創立され、今年で創立147年目です。

左写真は「久成寺」にある『小笠原小学校発祥之地』の碑です。

学校が始まった当初に小学校に通った子どもは30%程度で、ほとんどが男子でした。多くの子どもは学校に行かず、働いていました。それが3年後には、女子が20%、男子は50%を超えました。そして、明治の終わりには、男女ともに100%近くになり、日本の子どもの全てが小学校に通うようになりました。

明治の始めには、子どもは大事な働き手でした。わざわざ授業料を払ってまで学校に通わせるのは人々にとっては大きな負担でした。実際に農村では、貴重な働き手である子どもを学校に通わせることに反対の声が上がり、小学校廃止を求めて農民一揆が起きています。それにもかかわらず、100%の就学率になったのはどうしてでしょう。それは、身分制度が廃止され勉強をがんばれば、誰でも豊かな暮らしができる世の中になったからです。

ご存知のように江戸時代には「士農工商」という強固な身分制度がありました。武士の子は武士として、農民の子は農民として、生きていくことが強制されていました。ところが、明治時代になり、身分制度が廃止され、たとえ貧しい家に生まれたとしても、学校で優秀な成績を修めれば、将来への可能性が大きく開けるようになったのです。今でこそ当たり前のことですが、当時の人々には強烈なインパクトがあったようです。人々はどうにかして学校に通わせようとなりました。家柄や身分に関わらず、誰でも豊かになれるチャンスに、勉強しないわけがないのです。つまり、**学校には「勉強したいから行く」という子どもが集まっていたのです。**

勉強したいという子どもばかりが集まっているとしたら、そこでの教育は、大した指導の方法がなくても、教えることができってしまうものです。教わる子どもは覚えたいという気持ちがべらぼうにあるわけですから、下手な教え方でもどんどん覚えていきます。当時の日本は、指導法がなかなか進化しない国だったそうです。その原因は、こういうところにあったようです。

ところが、学校制度が整備され、教育の無償化などが進み、ほとんどの子どもが学校に行くようになると、**「勉強をしたくないけれども学校に行く」という子どもが増えてきました。**勉強したくないという子に教えるのは大変だということは理解していただけたと思います。



そこで、まず、**学習意欲を育てる（勉強をやる気にさせる）ことを考えること必要がとなりました。**現在、私たちが授業をつくるときに、いかに学習意欲を掻き立てる授業をつくるか、切実感のある学習の問題を設定できるかということは重要なポイントになっています。子どもたちが考えてみたい、やってみたいという授業を設定することが重要なのです。子どもたちが学習意欲をもってやる授業は、子どもにとって、楽しく・わかる授業、教師にとっては指導するのが楽しい授業になります。

<脱線します>…必要に迫られて学ばなければならない状況になり、学習意欲を奮い立たせ、身につくものもあります。私は中学・高校・大学と10年間、英語の授業を受けましたが、英語をしゃべれるようにはなりません。英語を話す必要に迫られていなかったことが原因の一つです。そんな私が、20年ほど前に、ニュージーランドに研修旅行に行く機会をもらいました。恐ろしいことに、日本語の全く通じない場所で、4週間過ごすことになったのです。私のつたない英語でしたが、必要に迫られて四苦八苦しながら会話をし、何とか過ごしてきました。「英語の通じる場所ならば生きていけるかもしれない…」と変な自信をつけて帰ってきたのです。留学をしてアメリカの家庭にホームステイをし、2・3年もすると英語をしゃべれるようになるといいます。必要に迫られ、学ぶ意欲が旺盛になるからだと思います。



ラグビーニュージーランド代表
オールブラックス

…経験したことによって、学ぶ意欲がわくこともあります。ニュージーランドの研修は、文部科学省研修でしたので、膨大な量の資料を押し付けられました。事前研修会もありましたので、一応目を通しましたが、全然、頭に入っていませんでした。ところが、研修旅行中、または研修旅行後に読み返すと「なるほどそういうことだったのか」ということがたくさんありました。経験したことによって、興味がわき、学ぶ意欲となったのです。



大工さんや調理師さんなど、手に職をもつ職業の場合、この職で生きていくと覚悟して弟子入りした人には、どんな教え方をしたとしても、教えられるのではないのでしょうか。学ぶ覚悟（意欲）がある人に、それを教える人がいれば、身に付くものだと思います。こういう職人の世界では、師匠的な立場の人が教えないこともあります。態度で理解しろ、先輩のワザを盗めという教え方でも、学ぶ覚悟（意欲）のある弟子は覚えていくものでしょう。

現在は、こういう職業の後継者を育てることが大変なようです。そこに、学ぶ覚悟（意欲）があればいいのですが、息子だからといって強制的にやらせようとしてうまくいかず、代々続いてきた職業がそこで途絶えてしまうということもあるようです。意欲をもって、師匠や先輩から、理論ではなくワザを教えられて覚えた人が、意欲のない人に教えるためには、そこに理論が必要になり、意欲をわかさなければならず大変難しいことになるのです。

毎年6年生が受けている全国学力・学習状況調査（今年は臨時休業による学習時間確保のため行われませんでした）の結果から、学習意欲が高い子の特徴について、次のことがあげられています。

1 規則正しい生活習慣を身につけている子

<毎日同じ時間に寝ている><朝ごはんを必ず食べてくる><ゲームをする時間が決まっている>
 こういう家庭の子は学習意欲が高いという調査結果があります。学力調査の結果もよい結果です。

2 家庭学習の習慣が身につけている子

家で学校の授業の復習をしているという子は、学習意欲が高く、成績もよい結果になっています。

3 読書をする習慣が身につけている子

読書をする習慣があるという子は、学習意欲が高く、学力調査の正答率も高くなっています。

4 自信や夢をもっている子

「自信や夢をもっていますか？」この調査にプラスの回答をした子は、学習意欲が高く、正答率が高いという結果が出ています。

子どもたちの学力の向上のためには、教師の力量を上げることが重要です。学習意欲のためにも魅力的な授業をつくることも欠かせません。そのため、日本の学校は、校内研究会という取り組みがあり、日々研究を積み重ねてきています。しかしまた、家庭の協力なしでは子どもたちの学力を向上させることができないことも事実です。夜は遅くまで起きていて、朝はギリギリまで寝ていて、1校時の開始から、眠そうな顔をしている子…、この子に意欲をもたせて指導することは、大変なことです。